Yamato Welfare Foundation
ヤマト福祉財団

NEWS

ヤマトグループ賛助会員向け
ニュース（季刊）
発行部数13万部・非売品

2018.1.20 Winter

No. 57

第18回ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式

もとIT企業経営者、もと刑事
異色の経歴から福祉に新しい風を

リレーコラム
夢をつないで

第8回

NPO法人ヒカリカナタ基金
理事長 竹内 昌彦

Profile
竹内昌彦氏：NPO法人ヒカリカナタ基金理事長、第17回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞
Dr.Sabina Shrestha：Professional Support Service Nepal(PSSN)理事長

アジアの子どもたちに光を

昨年12月、「ヒカリカナタ基金※」の仲間とネパールへ行きました。2016年12月に小倉昌男賞をいただいてちょうど1年後です。私は小倉昌男賞を3回いただいたと思っています。1回目は受賞した2016年12月。2回目は2017年5月にヤマト運輸労働組合の研修会で講演をさせていただき、私の本やDVDをたくさん買ってくださったことでした。桁違いの莫大なお金でした。紙面をお借りしてあらためて感謝を申し上げたいと思います。そして3回目は昨年、小児白内障治療プロジェクトのカウンターパートとの調印と現地視察のため、ネパールに行くということでヤマト福祉財団の瀬戸理事長をはじめ、大きな人の力と財力を支援していただいたことです。

岡山に住んでいる72歳の全盲の老人が、いくら心の中で思いを高めても何もできない。そのお力があって、始めてネパールに行くことができたし、契約も結べたと思っています。

ネパールで印象的だったのは、ダディン郡のチャウトデウラリ、ジバンプール集落の二つの小学校と、村の診療所に行ったことです。カトマンズから土煙が舞い上がるでこぼこ道を1時間以上かけて、子どもたちが学ぶ場所に行き、机に触れ、椅子に座り、「ああ、ここで勉強する子どもたちは目が不自由だったら困るだろう」と実感しました。

もう一つは、ネパール側で治療や手術に当たるカウンターパートの「プロフェッショナル・サポート・サービス・ネパール(PSSN)」のリーダー、Dr.サビナに出会えたことです。Dr.サビナは理知的で優しい声の持ち主でした。温かい手でしっかりと私の気持ちを受け止めてくださっているのがよく分かりました。この人だったら安心できる、それが嬉しかった。

ネパールに行くのに飛行機の時間も長いし、でこぼこ道もあるし、私には景色も見えません。それでも私に「しんどいなあ」といわせなかったのは「子どもの目が治る」そういう思い。それで頑張ることができました。

プロジェクトの実施は11月になりますが、目の不自由な子どもたちに一人でも二人でもいいから光が与えられるようにする、それが小倉昌男さんへの恩返しだと思います。

※アジアに多くいる、手術をすれば治る白内障の子どもたちへの支援を行うために竹内昌彦氏らが設立した基金。

CONTENTS

表紙写真　第18回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞者の山内民興さん(右)松浦一樹さん(左)が贈呈式開始前に緊張の面持ち

03 第18回ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式
もとIT企業経営者、もと刑事
異色の経歴から福祉に新しい風を

09 ネパール小児白内障治療プロジェクト
現地医療チームとの
実施合意文書に調印しました

10 助成先レポートVol.32 (NPO)出愛いの里福祉会
障がい者支援センター 出愛いの里 (兵庫県姫路市)
挑戦は利用者を、職員を変えた。

12 この街で、一緒に生きていく。障がい者のクロネコDM便配達事業
挨拶してもらうのが、いちばん嬉しい。
地域の一員と感じるから。

日本障害フォーラムが推進するイエローリボン運動に賛同しています。

第18回　ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式

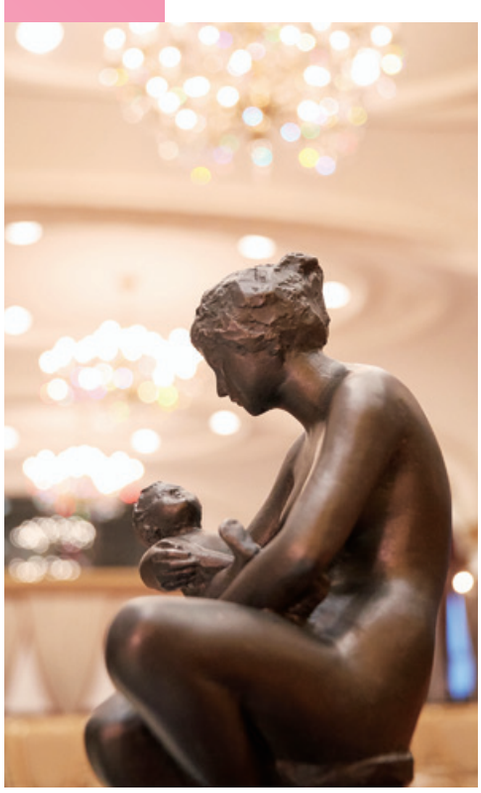
もとIT企業経営者、もと刑事 異色の経歴から福祉に新しい風を

毎年12月の障害者週間に、障がいのある方の雇用の拡大、労働環境の向上、高い給料の支給などに努められた2名の方を表彰する「ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式」。第18回 受賞者の山内民興さんと松浦一樹さんも、ふさわしい功績を築かれています。

写真前列左より受賞された松浦氏令夫人、松浦一樹さん、山内民興さん、山内氏令夫人。
後列左より森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、木川　眞ヤマトホールディングス(株)代表取締役会長、瀬戸 薫ヤマト福祉財団理事長、山内雅喜ヤマトホールディングス(株)代表取締役社長、神田晴夫ヤマトホールディングス(株)代表取締役副社長、長尾　裕ヤマト運輸(株)代表取締役社長。

受賞されたお二人のご家族や仕事関係者もお招きし、盛大に贈呈式を執り行いました

晴れがましい父の姿を撮影しようとする小さなカメラマン



「どんなときもつねに理論的に考え、前進を続ける方です」と山内さんの推薦者・（NPO）就労継続支援A型事業所全国協議会の久保寺 一男理事長

「候補者のだれもが素晴らしい内容をお持ちなので、時間をかけて論議し決定しました」と選考委員を代表して元環境事務次官の渡辺 修委員

「障がいを負ったとき、将来こんな晴れがましい場が待っているとは思いもしませんでした」と山内民興さん

柔軟な発想で福祉施設の可能性を広げたお二人を表彰

12月6日、日本工業倶楽部（東京都）で開催したヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式には、受賞者お二人の仕事関係者やご家族、歴代受賞者なども多数お招きし、お祝いに華を添えていただきました。

瀬戸 薫理事長は、冒頭挨拶で（社福）ぷろぼの理事長の山内民興さん、（NPO）ENDEAVOR EVOLUTION理事長兼事業長の松浦 一樹さんの功績を讃えています。

「先月、奈良と京都のお二人の事業所へお伺いしました（P6・7で紹介）。

山内さんは、東京でIT会社を経営されていましたが、喉頭ガンの手術で発声機能を失われました。闘病後、民間企業での経営手法を活かし、福祉の仕事に携わります。感心したのは、利用者さんが、PCやスマホを駆使できる訓練を受けていることです。奈良にある事業所を訪ねると、ロボットたちがダンスで歓迎してくれました。そのプログラムも利用者さんが作成しています」。

障がいのある子どもが、放課後に施設で社会人としての適性を学び、訓練を受けることができる「ぷろぼのスコラ」という仕組みも、山内さんが創り上げています。

「松浦さんは、少年課の刑事を勤められていたとき、子どもたちを逮捕し少年院に送るだけで良いのか、自立できる訓練こそ必要なのではと、福祉の世界に入られた異色の方です。離職者を出さない、仕事が合わなくても何度でもやり直せるようにと、いろいろな企業と提携。利用者さん一人ひとりに合った仕事を、ステップアップ型の就労支援スタイルで確立させています」。

松浦さんは、自宅マンションの同じフロアに部屋を3戸買取り、グループホームを開設。施設を出た後の生活もケアしています。

「お二人は柔軟な発想で福祉施設の可能性＝レパートリーを広げています」と紹介しました。

続いて選考委員を代表して渡辺 修委員が、選考の経緯を発表しました。

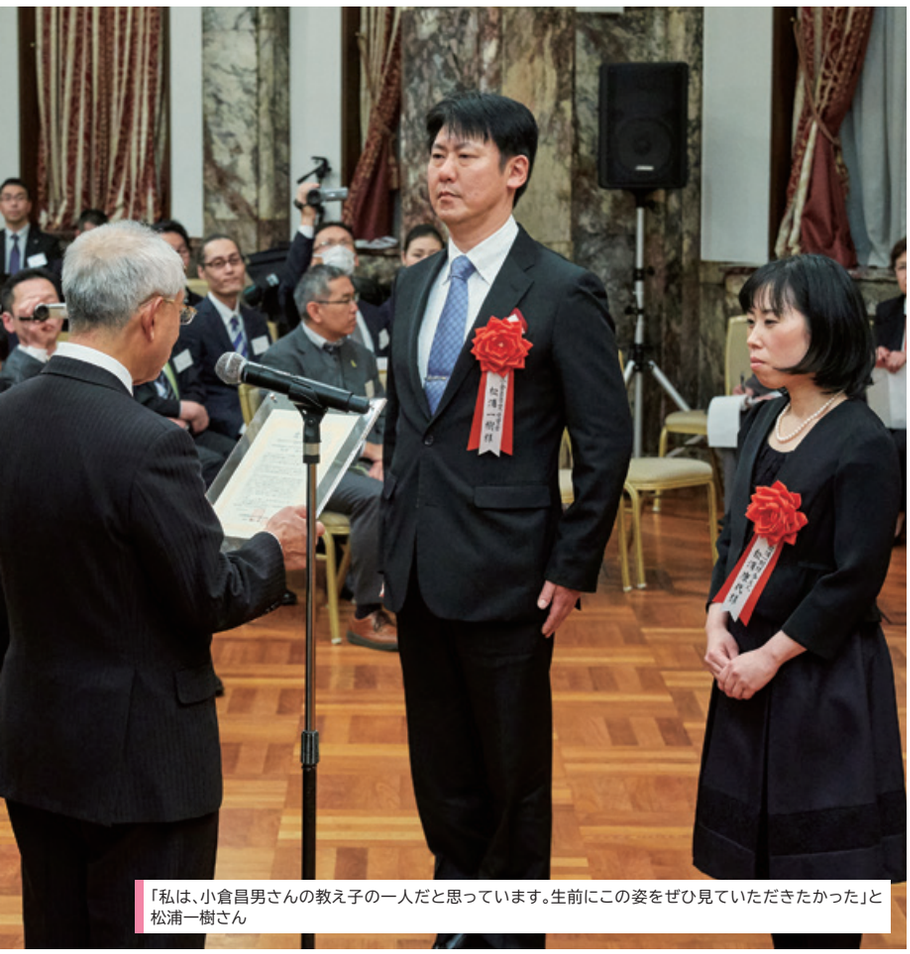
「山内さんは、2001年に福祉の仕事に関わられてから、奈良県内に就労継続支援A型事業所、B型事業所、就労移行支援事業所を開設。IT部門では20数名の利用者さんに11万円を超える月額平均給料を支給し、県内で1位の実績を上げられています。

松浦さんは、利用者さんを庇護するという福祉の考え方に疑問を抱き、働きたいと願う利用者さんのため、企業と対等に交渉できるNPO法人を立ち上げました。初年度は、19名に月額平均給料約10万円、現在は、20名に約11万2000円を支給しています」。

理論派と情熱派、共通しているのは決して信念がブレないこと

山内さんの推薦者の久保寺 一男さんは、「私が推薦した理由は、山内さんには生涯現役で福祉の仕事に携わっていただきたいと願うからです。山内さんは、私よりも福祉歴は短いのですが、密度は濃く、就労支援で右に出る方はいないと思っています。事業所名『ぷろぼの』は、ラテン語で『公共のために尽くす』という意味であり、彼の信念はまったくブレることがありません」と山内さんの人柄を伝えました。

「松浦さんも信念を貫く方。まさに見た目の通り、熱い正義の人です」と松浦さんの推薦者・安川淳子さんは話します。



「私は、小倉昌男さんの教え子の一人だと思っています。生前にこの姿をぜひ見ていただきたかった」と松浦一樹さん

「少年のような純粋な気持ちで周りを巻き込み、新しいことをやり遂げていく方」と松浦さんの推薦者・アロマセラピーサロン クレア経営者の安川淳子さん

「理想を追い続ける松浦さん。これからも失敗を恐れずにチャレンジしてください」と来賓代表で挨拶された厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部の宮嵜雅則部長

「初めてお会いしたとき『私は味方も多いが敵も多い、ぜひ力になってほしいと』声をかけられました。その迫力に、世の中を変えていこうと闘っているのだと心を動かされました。利用者さんをファミリーだと考え、なにがあってもあきらめず支援し続けていく、それが松浦さんのライフスタイルです」。

共生社会の実現には障がい者の社会参加が不可欠

推薦者のスピーチのあと、受賞者お二人と奥様が壇上へ。瀬戸理事長が、賞状ならびに正賞の雨宮 淳氏作のブロンズ像「愛」、副賞賞金100万円をお二人の受賞者に贈呈。お二人を陰で支え続けられている奥様には、花束をお贈りしました。

続いて来賓祝辞として、厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 宮嵜雅則部長よりお祝いの言葉をいただきました。

「共生社会の実現には、障がい者の社会参加が不可欠です。障がいのある方の自立と社会参加に貢献されている方を表彰するヤマト福祉財団が、20年以上も続いていることをうれしく思います」。

贈呈式の最後には、両受賞者が喜びの声をスピーチ(P8に抜粋)。会場からは、大きな拍手が湧きました。

贈呈式の後は会場を大ホールへと移し、祝賀会へ。今回初めての顔合わせとなるお二人が、和やかに挨拶を交わす姿も見られました。

社会福祉法人ぷろぼの　理事長　山内 民興さん

ステップ ゼロから始まる 充実した就労支援が特徴

奈良県で有数の就労支援実績をあげた福祉グループを率いる山内さんを訪ねました。

DATA
ぷろぼのグループ　就労継続支援A型事業所　2016年月額平均賃金
ITセンター大和八木　128,490円　IPFactry ぷろぼの　110,740円
2事業所合わせて38人が就労　また、就労移行支援事業では104名が一般就労を目指している。累計就労人数は、200人を超える。

ぷろぼの本部ビル前にて　右から瀬戸理事長、山内民興理事長、米田英雄統括施設長

新しい本部ビルは、人目を引く木造5階建て

奈良市の近鉄電車新大宮駅にほど近い場所に木造の美しい「ぷろぼのフェローシップセンター」はありました。ぷろぼのグループがそれぞれの事業を段階的に組み合わせた就労支援のしくみを実行する拠点として、各フロアが機能ごとに分かれています。

生活に必要な技術をみがく「自立訓練」

山内さんには、最初に手掛けた作業所でサポートした障がい者がパソコンを操作することでみるみる自信をつけていった経験があるそうです。この経験を基に自信を持つという自己肯定感を大切に、計算や金銭管理、ATMの使い方やスマートフォンやPCでの検索など、今の時代に合わせた働き方や暮らし方を学ぶコースとして「自立訓練」を設けています。訪問したときは、計算などの学習を通して集中力を身につけ、達成感を得られる訓練が行われていました。

実務さながらに指示を受ける就労移行支援事業の利用者さん(左)

働きたい人のステップに合わせた特徴あるしくみ

ぷろぼのグループの就労支援の特徴は、多段階に分かれたきめ細かな支援にあります。就労移行支援事業では、企業での就労をイメージしやすくするため全員がスーツや作業服を着用しています。朝のミーティングや仕事の打ち合わせも、企業で働く場合を想定していました。

「ITの使い方は、もっと早い段階で始めたほうがいいと思います。今の時代、スマホやパソコンを使って生活のための情報を知ることも重要です。生きていくためのスキルを身につける期間も必要だと実感しています」。最近ぷろぼのグループではステップゼロと言える取り組みを始めています。それは、放課後等デイサービス事業として特別支援学校等の中等部、高等部に通う子どもたちに対応したもので、ITの使い方や社会人スキルを楽しく学ぶことができるようにしたものです。学校を卒業して就労に向けた訓練によりスムーズに移行できるように時間をかけて慣れることに主眼が置かれています。

ぷろぼの食堂は、昼はランチ、夜も居酒屋として営業しています。

就労支援のプロフェッショナルを目指して

ホームページ制作や会計入力、調理・接客など、さまざまな職種を用意して、個性に合わせた就労経験ができるようになっているぷろぼのグループ。就労することで生きがいを持って地域で生活できるようになることを目指して、山内さんとスタッフのみなさんは日々工夫しつづけていました。

特定非営利活動法人ENDEAVOR EVOLUTION　理事長兼事業長 松浦 一樹さん

安定した仕事量に支えられ自立の途を描く

施設外就労に特化した就労継続支援A型事業所を立ち上げ、障がい者の暮らしを支える松浦一樹さんを訪ねました。

DATA
特定非営利活動法人 ENDEAVOR EVOLUTION
就労継続支援A型事業所　ワークチャレンジスタイルGOKENDO
2016年作業売上　41,782,421円　工賃支払総額 21,659,616円　平均工賃 111,648円
利用者20名に加えて、知的障がい者3名　精神障がい者1名　高齢者1名を法人職員採用とする。

五建堂空箱センターにて瀬戸理事長と記念撮影(左端が松浦一樹さん)

夕食時のみなさんと松浦さんの子どもたち。家庭的な雰囲気を大切にしています。

スピードが勝負。みるみる積み上がる空ボックス。

空箱の到着を待つ間に食品ケース洗浄作業も請け負っています。

安定した仕事量の確保

ENDEAVOR EVOLUTIONは、京都市伏見区横大路に物流拠点を持つ五健堂グループの中にテナントとして入居しています。「安定した仕事量を持つ施設外就労先として出会えたことが幸運でした」。五建堂では、京都府一円に広がる総合食品スーパー「フレスコ」の商品配送を請け負っていて、その業務から派生するさまざまな仕事に人材を必要としています。

店舗から空になって戻ってくるプラケースの整理もその一つ。「空箱センター」としてENDEAVOR EVOLUTIONの障がい者が一手に引き受けています。また、周辺の企業へも施設外就労を行っており、障がい者雇用にもつながっています。

日々の仕事の積み重ねが成長を促す

「空箱センター」の朝は、6時45分のミーティングの後、7時から夜間に戻ってきたプラケースの空箱整理が始まります。さまざまなケースが入り混じった状態で店舗から戻ってきた大量の空箱を同じケースごとに分けて積み上げていく作業をテキパキとこなすみなさん。「一人が育つとその人を目標にみんなも頑張るようになりました。リーダーも刺激を受けて新人のサポートを自主的に始めるようになったんですよ」。松浦さんも空箱の量が多い時には作業に入ります。「わたしは朝6時に出てきてお茶を沸かしています。早番、遅番を組み合わせて8時間労働で回していますが、多い人は月18万円くらいになりますね」。

施設外就労先に入居することで眼も行き届き、自立に十分な給料が手に入る仕組みとなっています。

グループホームで家族の温もりを味わう

車で15分ほど離れたグループホームも訪ねました。グループホームは、分譲マンションの10階で松浦さん家族の部屋の隣りに3戸並んでいます。「自分の住む部屋の隣りが空いたときに借金して買いました。使用目的を説明すると銀行もすぐに貸してくれたんです」。現在、6人がグループホームを利用して暮らしています」。帰宅するのが夕方6時をすぎるので夕食はいつも7時を回ってから。一般の家庭と変らない生活が送れるようになっています。「隣りに住んでいるので、様子はすぐに判ります。我が家の子どもたちもグループホームでよく遊んでもらっているんです」。

一人ひとりの幸せのために

「長い間、親元で暮らしてきて、生活にかかるさまざまな支出に実感がない人もいます。一人暮らしに必要なお金の見通しを立てることなど、計画だった行動ができるようにならないと、自立は厳しい。少しずつでもその感覚を養って、やがてはグループホームから自分の力で暮らすシェアハウスになっていけばうれしいと思っています」。

ENDEAVOR EVOLUTIONは、周辺の飲食店で毎月1回食事会を開催し、親睦を図っています。昼も夜も障がいのある人に寄り添い続ける松浦さん。ENDEAVOR EVOLUTIONは、家族のようなつながりを大切にしています。

働きながら次のステップへ 自然と成長できる仕組みを

受賞のことば

社会福祉法人ぷろぼの　理事長　山内 民興さん

1948年 愛媛県新居浜市生まれ。1973年 青山学院大学経営学部卒業、メーカー系企業で企画および開発関係に従事。1992年 東京でコンピュータ会社を設立。1999年 喉頭がんの手術で発声機能を失い、身体障害者3級となる。2001年 奈良で地域ボランティアを開始。2004年 福祉作業所「ぷろぼの」の運営コンサルタントへ。2006年（NPO）ぷろぼの設立、施設長に就任。2008年 同法人の理事長就任。2009年 就労移行および就労継続支援A型事業開始。2010年　奈良県ITソーシャル・インクルージョンセンターを開設。2011年 PC再生事業「なら福祉3Rセンター」開設。2013年 社会福祉法人格を取得。2016年 福祉型事業協同組合「あたつく組合」を設立。

知性と感性のバランスが大切

素晴らしい賞を贈っていただき、身に余る光栄です。障がいを負い、奈良で闘病生活を送っていた頃、こんな人生が待っているとは想像もつきませんでした。

いまから13年前、福祉をやってくれないかと声をかけられたときは、正直迷いました。それまでやってきたコンピュータから人間へと対象が変わるわけです。どうやって人を育てていけば良いのか、社会的に経済的に自立できる力を身につけるには、どんな手順で育成すべきか、見当もつきません。福祉、哲学、心理学などたくさんの本を読みあさりました。

そこで私が気づいたのは、福祉とは人の生き様を見つめ支えること。人はだれもが社会で、集団で必要とされたい。そのために必要な知識や技術を学べる仕組みを整えていくことが、福祉には必要なのではないかと考えました。

人は、なにか小さなことでもできるようになると次の欲が出ます。こんなこともできたらうれしいと考えます。これを私は「知性と感性のバランス」と捉えました。

地域社会の中で成長を

1年ほど前、20代前半の発達障がいの利用者さんが描いたチラシが素晴らしくて、凄いねと思わず声をかけました。3ヵ月後のセミナーでその子のお母さんが「生まれて初めて外の方に誉められたと、息子が喜んでいました」と話すのを聞き、やはり知性と感性のバランスが大切だと再認識しています。

人には、他人に認められ自己肯定できる機会が必要ですが、働かなければ、その経験を積むこともできません。事業所や福祉の中だけではなく、地域社会の中でさまざまな人と交わり働きながら、自然に次のステップへと挑戦し、成長できるプログラムを創り出すことが私の仕事です。

小倉昌男さんは心の師 志を継いでいきます

受賞のことば

特定非営利活動法人ENDEAVOR EVOLUTION
理事長兼事業長　松浦 一樹さん

1968年 大阪府堺市生まれ。1992年 佛教大学社会学部社会福祉学科卒業、京都府警察官 拝命。1999年 京都府警察官を退職し福祉施設職員になる。2006年 石川県白山市 第21回暁鳥敏賞受賞「福祉と非行～元刑事と非行少年の軌跡～」。2007年（NPO）ENDEAVOR JAPAN 設立、統括事業長就任。2009年 暁鳥敏賞受賞論文が漫画化される、漫画「夢を追いかけろ！（かもがわ出版）。2014年 ワークチャレンジスタイルGOKENDO設立、事業長に就任、（株）REGEND設立、グループホーム開設。2015年 （NPO）ENDEAVORE EVOLUTION 設立。2016年（株）五健堂本部長付相談役。

なぜ再犯を重ねる子がいるのか

今朝も4時半に起床し、隣のグループホームのみんなと朝礼を行いました。「今日、贈呈式に出席してくるよ」と伝えると「頑張ってきてね」と笑顔で送り出され、ここに立っています。じつは私にとってこの賞は特別な思い入れのある賞です。

私は、大学で児童福祉を学び、ある疑問を持ちました。なぜ再犯を重ねる子どもがいるのか。障がいがあっても、罪を犯してもやり直せる場を創りたい。そのために警察に入り、少年課の刑事となりました。しかし現実は、捕まえたら少年院に送るだけ。悶々と悩んでいたとき、私は知的障がい者が選挙ポスターを破る事件を担当します。事情聴取のため訪ねた作業所で私が見たのは、楽しそうに働く人たちの姿でした。

「障がいのある人たちと、非行少年や引きこもりの人が、一緒に協力し競い合いながら働ける場をつくれたら」。その思いが、転職の契機となりました。これはいまだに実現できていない、私の目標の一つです。

後押ししてくれた言葉を胸に

福祉の世界に入った私は、またも現実の厳しさを思い知ります。利用者さんに働く場を増やしたいのに認めてもらえない。やりたいと思ったことを実現できないもどかしい日々が続く中、ある講習会で衝撃を受けました。

「いまの福祉は間違っています。もっと障がい者に働いてもらわないといけない」。

私は、同じ考えの方がいると感激。講習会のあと、講師のもとへ駆け寄り、思いのすべてをぶつけると、食事に誘っていただきました。そこで「頑張れよ、福祉の仕事をずっと続けていけよ」と励ましていただいたのです。この講師が、小倉昌男さんでした。

今回、受賞のご連絡をいただいたとき、涙があふれました。大変栄誉な賞をいただき、ありがとうございます。

現地医療チームとの実施合意文書に調印しました

ダディン郡チャウトデウラリの集落。青い屋根が小学校、右上が村の診療所、ここにドクターが出張し診察を行います

椅子に座って目の不自由な子どもたちに思いを馳せるヒカリカナタ基金の竹内氏

PSSN、ヒカリカナタ基金、ヤマト福祉財団、三者調印後の握手を交わしました

もう一ヵ所、診察を行う予定のジバンプールの学校

カトマンズの眼科病院

診察をおこなうDr.サビナ

ヒカリカナタ基金は、治療すれば目が見えるようになる子どもたちへの支援をしようと、第17回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞者の竹内昌彦氏らが、小児白内障治療を目的に創設されたものです。その副賞賞金も基金の一部となりました。

子どもの頃に失明した竹内さんは、モンゴルのマッサージスクールやキルギスの視覚障がい者リハビリテーションセンターの建設、貧困により手術を諦めていた視覚障がい児の手術費用を肩代わりするなど、竹内さんの手がけた支援は講演活動やご自身の半生を綴った書籍の売上金で賄われています。

ヤマト福祉財団は竹内さんから「次に支援を必要とする国はないか」と相談を受け、ヤマトグループで就労するネパール人が急増していることや、貧困により手術ができずに失明する白内障患者が多いことからネパールへの支援を提案しました。併せてヤマト福祉財団が現地調査や監理その他の付帯費用を分担することも提案しました。

小児白内障治療の資金援助を行うヒカリカナタ基金とヤマト福祉財団は、ダディン郡の二つの小学校と目の診察をする診療所を視察。昨年12月10日に、本プロジェクトの受け入れ機関で診療・手術を実際に行う「プロフェッショナル・サポート・サービス・ネパール（PSSN）」と実施合意文書に調印を行いました。

私たちの賛助会費が活かされています ／ 障がい者給料増額支援助成金

挑戦は利用者を、職員を変えた。

優美な姫路城を左手にかすめるように、姫路駅から3kmほど。古民家もちらほら残る古くからの住宅街にこぢんまりと構えているのは、障がい者支援センター〈出愛いの里〉の第2作業所です。小さな作業所は昨年2月から本格的に乗り出したDM事業で活況を呈していました。

Data

特定非営利活動法人 出愛いの里福祉会
障がい者支援センター 出愛いの里
兵庫県姫路市

①②昨年2月から本格的に動き出したDM事業は、第2作業所15名が担当、売り上げは一昨年の約3倍を達成　③助成で封緘機を整備、より効率がアップ　④高橋勝茂主任　⑤高橋誠施設長　⑥プラダン洗浄の発注元である、三菱電機ロジスティクス（株）白浜営業所様へ納品。写真左はご担当の石田利樹さん　⑦自動車部品を運ぶための包装資材を洗浄する仕事を行う、第2作業所のプラダンチーム　⑧朝礼で司会を担当、昨日の目標達成を報告する前川哲朗さん　⑨姫路城

6畳2間の作業所から

「前の通りは、姫路市内で一番バスの便が多いところ。市の補助で障がい者は全線無料なので、通いやすい立地なんです」と語るのは施設長の高橋誠さん。

福祉施設といえば、交通の便が悪い山奥という時代に施設職員をしていた高橋施設長は、そのアンチテーゼとして「障がいを持った人がごく普通に町にとけこむ」理想を実現させたいと、生活介護を主とする6畳2間の作業所を町なかに開きました。2005年のことです。時の流れを受け、5年後には就労継続支援B型事業所を立ち上げますが、利用者に払えた給料は月3000円程度。「それまでは『和気あいあいとしたアットホームな作業所』で良い時代でしたが、B型に移行した以上これじゃいかん」と、2010年に財団主催の〈はたらく力革新塾〉にヒントを求めて参加しました。しかし、「そこに行って正直場違いだと思った。無謀なところに来てしまった」と当時を振り返って高橋施設長。

革新塾が掲げる目標は月額工賃5万円。見回してみると他の参加団体は、規模も大きく、すでに1万5000円といった給料を出しているところばかり。また、電子メールでやりとりし、プレゼンテーションソフトを用いて発表をするという状況に「これはもう私の時代じゃない。次代に引き継がんと…」。

売上拡大の白羽の矢

そこでバトンを渡されたのが施設長のご子息で、主任を務める勝茂さん。

「当時まだ、福祉の世界には働かしちゃ駄目と

いった雰囲気がありましたが、『働いていいんだ。間違いじゃないんだ』というのが嬉しくて、すごく共鳴するものがありました」

そこからは一つずつ、革新塾で学んだことを積み重ね、次第に成果が付いてきました。

とくに2015年から不定期に受注していたDM事業を、昨年2月から助走期間を終えて本格化させると、それまで稼ぎ頭だったプラスチックダンボールシート(プラダン)の洗浄事業を売上で逆転するほどに。

電子部品を配送するときに、製品を埃などから守るカバーとして使用されるプラダンの洗浄は2012年より受注し始め、現在では取引先の物流企業から独占的に請け負うまでになりましたが、それだけにこれ以上の売上拡大は見込めません。そこで選んだのが、丁合や封入、封緘を請け負うDM事業でした。

7年で手が届く、ついに大台へ

しかし、そのDM事業も手放しで成長したわけではありません。

「電話帳で姫路の会社に片っ端から電話でアポを取って、営業をしていったのですが軒並み断られまして…」と勝茂主任。市内の事業所の多くはDM発注業務を、大都市にある親事業所で一括して管理していたためです。姫路市外に営業の手を広げるしかありません。

「でも神戸にも需要はそれほど…。あとは大阪だけ。そこでちょっと躊躇するというか、大阪まで高速使って片道2時間ぐらいかけて割に合うのかと…」でも蓋を開けてみれば「すぐに行っていればよかったな」。

今では4社と定期的な取引をするようになり、受注量も大幅アップ。そうなると処理能力の向上、効率化が欠かせません。そこで昨年4月に封緘機と結束機を整備。当財団のステップアップ助成金を活用しました。それまではすべてが手作業。封緘はスティック糊を使い、結束は難易度が高いため職員の仕事。それが今では月約8万通ほどの受注で推移、2017年上期の給料は4万3042円に達しました。なにより利用者さんに変化が訪れたそうです。

「給料が上がるにつれ責任感とか自信を抱くようになるのが目で見て分かりました」職員も利用者さんの力を信じるようになったと勝茂主任は言います。作業所が狭く、今はまだ理想の作業ラインの完成には程遠いそうですが、それでも5万円の夢はもう目前です。

労働組合支部執行委員長
助成先訪問 Series 27

ヤマト運輸労働組合
姫路支部執行委員長
大江 博文 さん

利用者さんの素敵な笑顔に出会えたことに感謝したい。

本日はカンパ活動の大切さと、その意義をまざまざと見せてもらった気がします。ひたむきさというか、真面目な皆さんの姿には感動しました。カンパは「人」の真心を表し、それが集まることで「人々」の真心となり、初めて大きな力になるのだと思います。全国的に見れば姫路は支部としては大きくない。でも、熱い人間はたくさんいて、カンパに協力してくれる人の数では引けを取らないと自負しております。ヤマトへ帰って、今日のことをいかに伝えるのかという宿題もいただきましたが、他にもどんな形で協力できるのか、考えていきたいと思います。

この街で、
一緒に生きていく。

公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコDM便配達事業

挨拶してもらうのが、いちばん嬉しい。地域の一員と感じるから。

青森県五所川原市。JR東日本五能線の五所川原駅から車で約15分の住宅街に、社会福祉法人愛生会"ワークセンターつばき"はあります。3人のメイトさんが徒歩で、2人のメイトさんが職員と一緒に車で、毎日元気にクロネコDM便を配達しています。

●五所川原市

▲「配達することが大好きで、新聞配達もしています。吹雪だって苦になりません」と清野幸貴さん。

◀配達ルートを地図で確認する木村正治さん。

◀下／持ち帰りした配達先などを書き込んである地図。広いエリアを担当しているため、これはほんの一部です。

青森県の中西部にある五所川原市。冬は雪で白く覆われ、しばしば吹雪の舞う街です。就労継続支援B型事業所"ワークセンターつばき"は、五所川原市の中心部から少し離れた、農地を含む住宅街を担当。広範囲に渡るエリアでクロネコDM便を配達しています。

徒歩の3人にはすべてを任せて

"ワークセンターつばき"がクロネコメール便（後にDM便）事業をスタートしたのは、2005年。2009年からは自立支援事業として本格的に取り組みを始めます。1日平均約250冊。徒歩で配達する3人のメイトさんは、信頼されてすべてを任されています。

それぞれのエリアのDM便の仕分けが終わると、メイトさんたちは配達ルートを自分で決定。その日はどの地点から配り始めるかを職員に伝えます。配達エリアは施設から離れているため、メイトさんたちは職員の運転する車に乗って、それぞれのスタート地点へ。配達を終えたら、帰りは歩いて戻ります。配達数が多くて遅くなったり、天気が急変した時などは、中間地点から施設に電話。すると、職員がメイトさんたちを迎えに来ます。

車チームは元気に楽しく安全に

車で職員と一緒に配達する2人のメイトさんは、かなり広範囲のエリアを配達しています。職員が仕分けをし、配達ルートに沿って車で出発。職員が「はい、次は○○さんと○○さん」とDM便を手渡すと、後部座席に座っている2人はさっとドアを開けて配達へ。対向車の来る側を担当するメイトさんは、慎重に安全を確認しながら道路を渡り、投函します。車に戻る時もしっかりチェック。いつも笑顔で明るく楽しく、安全第一がモットーです。

●青森主管支店　五所川原センター
面積400㎢／人口52,000人／世帯数20,000世帯

●社会福祉法人愛生会"ワークセンターつばき"
就労継続支援B型事業所
2005年からクロネコメール便（DM便）配達を開始。1日平均配達冊数、約250冊。他の活動は、野菜や果物の洗浄、袋つめ、梱包作業など。

「障がい者のクロネコDM便配達事業」
参入施設数 317施設　従事者数 1,705人（2017年10月現在）
お問い合わせは……（公財）ヤマト福祉財団　DM便担当
TEL 03-3248-0691　FAX 03-3542-5165
http://www.yamato-fukushi.jp/

※ 2015年4月1日より、クロネコメール便配達はクロネコDM便配達へと変わりました。

雪が降ると目印が消えてしまう

青森県の冬期の積雪量は、平均約60センチ。冬の初めには、夜の間に町が雪で覆われてしまうことがあります。屋根の色や門柱の形など、目立つもので配達コースを覚えていると、目印がなくなってしまい、困ることも。雪が降った後は、雪の中でもわかる目印を見つけます。

徒歩チームのメイトさんはDM便をバッグに入れて配達。重いカタログが多い日はプラスチックの大きなケースにDM便を入れ、アルミのカートを使って配達します。雪の日はカートも重くなって動かしにくくなるため、ソリを使うことも検討中です。

▲向かって左から／生活支援員の寺田健二さん。「犬が苦手」と笑いつつも明るい菊池文一さん。ポストへDM便を投函するやり方が丁寧で上手な三橋勝さん。

挨拶の練習から朝が始まる

朝礼で必ず行うのは、挨拶の練習。「おはようございます」。「ありがとうございます」。職員の後に続いて、大きな声で繰り返します。

「練習のおかげで、町で声をかけられても、すぐに挨拶ができるようになっています」と話すのは、生活支援員の寺田健二さん。「挨拶の声を聞いていると、体調もわかるので、大切な日課です」。

横山正樹所長は「地域の中で役に立っているという意識が仕事に反映しています。笑顔が増えたし、どんな吹雪の日もいとわない。みんな配達が好きだと言う。頼もしいですよ」と語ります。

◀「配達は生き甲斐。生きている限りDM便を配達したい」と木村正治さん。
▼もともとよく知っている町でしたが、約1ヶ月でほぼ地図を覚えたという今由紀子さん。「もっと広いエリアを担当したい」。

▲DM便が濡れないようにしっかりとポストに入れる今由紀子さん。

お客さまが待っているという感覚を忘れずに

ヤマト運輸青森主管支店　五所川原支店　對馬聡支店長は「チームワークの良さを感じます。いつもお客様第一という思いを忘れずに続けてほしい」と期待を込めて話します。

ヤマト運輸青森主管支店　サービスセンター　大澤道信センター長は「広域エリアを配達してもらって助かっています。五所川原は吹雪く日が多いので、安全第一で、怪我なく、笑顔で仕事をして欲しい。そして、いつもお客様が待っているという感覚を忘れずに」と結びました。

街の人から挨拶してもらうのが嬉しいと語るメイトさんたち。地域の一員として認められているという実感が、みんなの弾ける笑顔につながっています。

◀前列向かって左から／"ワークセンターつばき"横山正樹所長、今由紀子さん、清野幸貴さん
後列向かって左から／生活支援員　寺田健二さん、木村正治さん、菊池文一さん、三橋勝さん、ヤマト運輸青森主管支店　サービスセンター　大澤道信センター長、ヤマト運輸青森主管支店　五所川原支店　對馬聡支店長、ヤマト福祉財団東北支部　小原守事務長

▶向かって左から／生活支援員　寺田健二さん、横山正樹所長

スワン工舎卒業生訪問 25 大木伸銅工業株式会社さま

大木伸銅工業株式会社／家電、住宅設備、自動車、コンピュータ、文具メーカーなどの部品素材となる黄銅を製造販売しています。工場の製造現場や総務、食堂などで、現在5名の障がいのある方が働いています（2018年1月現在）。

食堂責任者の清水義一さん（右から二人目）は、山口さん（中央）に「もっと調理も任せていきたい」と期待しています

山口さんの配るお味噌汁は「はい」と元気な声と笑顔付き

明るい笑顔で一声かけてお味噌汁を出してくれる山口さん。その姿に、従業員はいつも元気をもらっています。「彼女が来てくれて良かった」と食堂スタッフの評価も上々です。

■ヤマト自立センター スワン工舎　就労に必要なスキルの習得はもちろん就労先の開拓からジョブコーチによる就労後のサポートまで一貫したプログラムで、障がい者の自立支援に取り組んでいます。

調理補助の方法なども覚え 責任ある仕事をどんどん任せたい

山口さんが勤めるのは、銅と亜鉛ををあわせた黄銅などを製造する素材メーカー・大木伸銅工業（株）の社員食堂です。「仕事は楽しいですし、賄いがとても美味しい！」と笑う山口さんは、勤務して約半年の間で少し体重が増えてきました。

「食欲が出てきて良かった（笑）。夏の厨房は、ガスレンジや食器乾燥機などの熱で冷房が効かないほど暑くなります。最初は、慣れない仕事の忙しさに頭がボーッとなり、休憩を取らないと辛そうでしたからね」と総務部長の守屋雅博さんと人事総務課の大類正明さん。周りの方が体調を気にかけてくれるのも、山口さんのまじめな勤務態度を評価しているからこそ。

味噌汁の提供は、山口さんに任されています

立ち仕事にも慣れました

山口 里穂さん　大木伸銅工業（株）・食堂（平成29年6月30日入社）

山口さんの勤務時間は、9:00～16:00。休日は、友だちとカラオケや食事に出かけリフレッシュ。ずっとこの仕事を続けたいと話しています。

「山口さんに仕事をお願いすると、はい！と気持ち良く応え、動いてくれます。お味噌汁を出す時も、いつも一声かけて渡してくれるので、みんな喜んでいます」。

現在、山口さんは、お味噌汁のカウンターサービスを一人で担当しています。昼食時間帯の12時～13時には、120名くらいが食堂を利用するので大忙しです。

「ずっと立ったまま働く厨房の仕事にも慣れ、食器などの片付け作業も上手になりました。今後は、調理もできるようになってほしい。責任ある仕事をどんどん任せていくつもりです」と食堂責任者の清水義一さん。

「彼女は、うちになくてはならない存在ですよ」と先輩方も山口さんを評価しています。

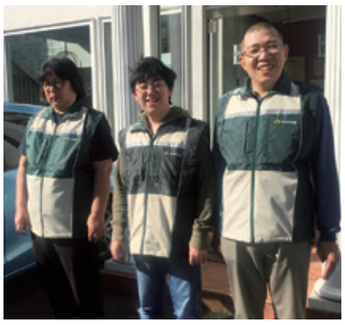
若手の人材採用は、社員・パートの高齢化が進む大木伸銅工業（株）の課題の一つです。

「当社には、工場以外にも障がいのある方の働く場はいろいろとあります。大切なのは、実習を通して本人と会社の要望をマッチさせ、双方が納得できる形で雇用していくこと。社員として長く継続して働いてほしいですからね」と守屋さんは話しています。

「1月4日の初出式は、成人式も行い、20歳を迎える山口さんをみんなでお祝いします」と総務部長の守屋雅博さん（右）と人事総務課の大類正明さん

クロネコDM便配達本人による特別報告会

クロネコDM便配達事業では、クロネコDM便を配達する施設が全国に317ヵ所、約1600名の方が活躍されています。その中から地元で「クロネコDM便配達本人による特別報告会」の開催を希望する施設を公募。ご応募いただいた施設の報告会です。



株式会社エースフロンティア クローバー（北海道帯広市）

クローバーは11月16日、ホテル日航ノースランド帯広で特別報告会を開催し、地域の方など75名が参加しました。

平成29年1月からクロネコDM便配達を開始し、多くの利用者さんがクロネコメイトとしてクロネコDM便配達に携わり、今では自信をもって配達できるようになりました。また外に出て配達することが体力強化にもなり、楽しんで働いています。

報告会では日々の配達の様子をスライドショーで紹介し、3名のクロネコメイトさんがクロネコDM便配達の仕事を通して感じたことなどを自分たちの言葉で発表し、これからも配達を続けていきたいと来場者に報告しました。

利用者さんの給料増額へ向かって

夢へのかけ橋 実践塾活動報告

夢へのかけ橋プロジェクト
経済的な自立力を備えた新しい福祉に向かって

11月9・10日「第2回 楠元塾（第2期）」

大量調理や高齢者配食など 楠元塾長の施設で現場を見学

11月9・10日、宮崎県の楠元塾長の施設（社福）キャンバスの会で第2回楠元塾を開催しました。初日は、宮崎市JA 会館内で運営するAZM レストランを見学後、お惣菜を製造する（株）丸佳へ。ここではメニューに合わせて大量のゴボウやダイコンなどをカット、下味も付けて真空パックし長期保存する大量調理を行っています。

「こうして準備すれば、突然、お弁当の大量注文が来ても対応できますし、統一した味で効率的に調理もできます」と説明を受けました。

翌日は、お弁当のまるよしを見学。研修では、弁当づくりの流れ、棚卸しの方法、高齢者配食での工夫点などを学びました。

「お客様の弁当箱には、一人ずつ気をつけなければならないポイントのメモを添付しています。福祉施設では、高齢者食に必要なキザミ・トロミ食を、日頃から利用者さんに提供していますが、コンビニなどでは簡単に対応できません。私たち福祉施設の得意分野を伸ばしていくことが、成功の鍵となります」と楠元塾長は塾生たちに伝えました。

効率的な調理と味の統一を実現する大量調理の方法を（株）丸佳で見学。

「写真を持ち帰り他の職員にもぜひ見てもらいたい」と食品庫の様子をなどをつぶさに写真に撮る塾生たち。

高齢者食では、一つひとつの弁当箱にお客様の要望を添付。「きめ細かな配慮、対応こそ福祉施設の強み」と楠元塾長。

10月27・28日名古屋市で開催　第3回 新堂塾フォローアップ研修

塾卒業後も有志が集まり、取り組みを報告・検討し合う新堂塾フォローアップ研修。第3回は、10月27・28日に名古屋市にある（社福）ゆたか福祉会で開催しました。2日間の研修では、鈴木清覚理事長と東京学芸大学 菅野教授（新堂塾アドバイザー）の講演、ワークセンターフレンズ星崎の仕事場の見学、卒業者による成果発表を行いました。

「本日の目標数と到達具合を電光掲示板に表示し、一目でわかるようにした」。「お金に換算したマグネットの数で各利用者さんの出来高を示し、意欲を高めている」。「定期案件を獲得し、DMの売上を前年比320%に伸ばすことができた」などを報告。菅野教授は「仕事の進み具合や利用者さんの成長レベルを数値化し、だれもが見えるようにしている点が良い」など各自の取り組みについて講評。「一つひとつ経験を積み上げながら、利用者さんへのアプローチを進めてほしい」と声をかけました。

現在、新堂塾長に学ぶ第3期生の希望者やワークセンターフレンズ星崎の職員約20名も参加しました。

ワークセンターフレンズ星崎では、仕事の進行状況を電光掲示板に表示。参加者の注目を集めました。

ヤマト福祉財団 News No.57
1月20日発行 2018 Winter
公益財団法人ヤマト福祉財団

Information of the Art

ターナー　風景の詩（うた）
京都展

J・M・W・ターナー《セント・オールバンズ・ヘッド沖》
1822年頃 水彩・紙 ハロゲイト、メーサー・アート・ギャラリー ©Mercer Art Gallery, Harrogate Borough Council

イギリスで最も偉大な画家ターナー

ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775～1851）はロンドンに生まれ、イギリスで最も偉大な画家と言われています。風景画において、その卓越した技法により、嵐の海や崇高な山、穏やかな田園風景などの自然の多様な表情を描きました。10代の頃から水彩画家として才能を発揮し、1789年王立美術学校に入学、1799年、24歳でロイヤル・アカデミーの準会員、1802年には最年少の正会員になります。さらに、1808年には王立美術学校の教授に就任、1837年まで同職に在職しました。

革新的な風景表現

彼はイギリス国内はもとより、フランス、スイス、イタリア、ドイツ各地を旅行し多くの風景画を描きました。光と空気に包まれた革新的な風景表現は、今日においても多くの芸術家にとってインスピレーションの源になっています。作品の中には印象派の先駆けではないかと思わせるもの、あるいは抽象画のようなものも見受けられます。

本展は、スコットランド国立美術館群などイギリス各地と日本国内の美術館から選りすぐりの油彩画、水彩画約70点と版画をご紹介し、最新の知見をもとにターナー芸術を再考、その核心と魅力に迫ります。

本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

DATA

開催期間 ▶ 2018年2月17日(土)～4月15日(日)
休　館　日 ▶ 月曜日(祝日の場合は開館、翌日休館)
開催場所 ▶ 京都文化博物館
アクセス ▶ ・地下鉄「烏丸御池駅」下車【5】番出口より徒歩3分
※地下鉄「烏丸御池駅」出入口工事のため、2018年1月5日(金)から2月16日(金)まで【5】番出口が使用できなくなります。工事期間中は【3-2】番出口をご使用ください。
・阪急「烏丸駅」下車【16】番出口より徒歩7分
・京阪「三条駅」下車【6】番出口より徒歩15分
・市バス「堺町御池」下車、徒歩2分
開室時間 ▶ 10:00～18:00(金曜日は19:30まで)
※入場は閉室の30分前まで
観　覧　料 ▶

	一般	高大生	小中生
当日	1,500円	1,200円	500円

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、被爆者手帳、戦傷病者手帳の呈示で入場料無料。また、障がい者1名につき介護者1名の入場料が無料
主　　催 ▶ 京都府、京都文化博物館、毎日新聞社、MBS、京都新聞、スコットランド国立美術館群
後　　援 ▶ ブリティッシュ・カウンシル、(公社)京都府観光連盟、(公社)京都市観光協会、KBS京都、エフエム京都
協　　力 ▶ 日本航空
協　　賛 ▶ 大日本印刷
問い合わせ先 ▶ TEL：075-222-0888(京都文化博物館)
ホームページ：http://www.bunpaku.or.jp/
巡回情報 ▶ 福岡会場(北九州市立美術館)開催中　2017年11月3日(金・祝)～2018年2月4日(日)
東京会場(東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館) 2018年4月24日(火)～7月1日(日)
福島会場(郡山市立美術館)予定 2018年7月7日(土)～9月9日(日)

J・M・W・ターナー《ヘレヴーツリュイスから出航するユトレヒトシティ 64号》1832年展示 油彩・カンヴァス 東京富士美術館 ©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

J・M・W・ターナー《ソマーヒル、トンブリッジ》1811年展示 油彩・カンヴァス　エディンバラ、スコットランド国立美術館群
©Trustees of the National Galleries of Scotland

ウィリアム・アラン《ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー》
制作年未詳 インク・紙 エディンバラ、スコットランド国立美術館群
©Trustees of the National Galleries of Scotland

ご協力ありがとうございました

スワンのクリスマスケーキ

昨年12月に販売したスワンのクリスマスケーキは、
9万7681個となりました。
全国のヤマトグループのみなさま、
いつもご協力をありがとうございます。
これからもみなさまに喜んでいただける商品を
お届けしていきます。
ありがとうございました。

株式会社スワン

つたわるフォント 読みやすさを追求した書体
VEGETABLE OIL INK

詳細情報・最新情報は http://www.yamato-fukushi.jp/
ご意見、お問い合わせは y.zaidan@yamatofukushizaidan.or.jp まで